

REPORT

バイエルン州立歌劇場  
《ニーベルングの指環》後半

# キリル・ペトレンコの 《指環》ツィクルス②

取材・文=中 東生  
Text=Shinobu Naka  
Photo=Wilfried Hölzl

キリル・ペトレンコ指揮によるバイエルン州立歌劇場のワーグナー  
《ニーベルングの指環》、いよいよ第2日《ジークフリート》と第3日  
《神々の黄昏》だ。先月号でもお伝えしたが、このツィクルスは、第一  
次世界大戦終結100周年、バイエルン州立歌劇場現体制100周  
年、ナツィオナルテアター建築200周年の記念年を祝うものだ。  
このプロダクションそのものは2012年にプレミエ上演、いまだでは  
バイエルン州立歌劇場の看板演目となっている。

## 神々しい達成感

### 《ジークフリート》

キリル・ペトレンコの《ニーベルング  
の指環》に通り始めてから、ワーグナー  
のロマンティックで劇的な音楽が、日常  
生活の中でもしばしば響いてくるように  
なった。ワーグナーの甘い毒が回って来  
たようだ。

《ジークフリート》の幕が開くと、エキ  
ストラの輪がブリュンヒルデを囲む炎を  
暗示している。木の枝を持って森になっ  
てみたり、ヒマワリの花を持って野原を  
表現したり、ブリュンヒルデが眠る岩に  
もなるエキストラは、演出家のアンドレ  
アス・クリーゲンブルグによって、引き  
続き大活躍を強いられている。

ミーメは《ラインの黄金》と同じくヴ  
オルフガング・アブリンガー・シユペル  
ハッケが熱演し、男声陣でいちばん多く  
の拍手を浴びていた。ジョン・ラングレ  
ンも、ヴォルフガング・コッホの代役と  
して《ワルクユール》でヴォータンを歌  
った時には不満が残ったが、《ラインの黄  
金》と同じアルペリヒに戻ると、効果的  
に立たせた子音で悪役を見事にこなし  
た。題名役のステファン・ヴィンケは声

の焦点が決まらず、細やかな表現はでき  
ないけれど、歌い続けても健やかな声  
が  
どどん湧いてくるのが頼もしい。

第1幕でのオーケストラは運命的で威  
圧的ですからある。ワーグナーの特性とも  
言えるその音楽が、ペトレンコにかかる  
となぜ特別な響きを帯びるのか考えてみ  
た。それは、どんなに決然とオーケスト  
ラをかき鳴らしても、彼の左手は限りな  
く柔らかく動いて、フレーズを歌わせる  
ことを忘れないからだろう。時にはオー  
ケストラのメロディのほうに歌手より歌  
心を感じさせるほどだ。第3幕冒頭のヴ  
アイオリンのユニゾンも完璧に揃って芳  
しい。ジークフリートの歌唱がその精緻  
さの中にうまく混ざれないのが歯痒い  
が、それでも疲れを知らない声で情熱的  
に歌い、すべてがブリュンヒルデの目覚  
めの音楽で成就する。その情熱的で輝か  
しい音楽的達成感は神々しい。ブリュン  
ヒルデは継続してニーナ・ステンメが好  
演した。(1月31日)

## 羨望すら抱かされた終焉

### 《神々の黄昏》

今回のツィクルスでは、3演目すべて  
のブリュンヒルデを歌える喜びを語って

Kirill Petrenko conducted "Siegfried" and "Götterdämmerung"  
from "Der Ring des Nibelungen" in Bayerische Staatsoper



《神々の黄昏》終幕から。病気にもかかわらず、5時間40分の長丁場を歌い演じきったステンメ(右、ブリュンヒルデ)とガブラー(左、グートルーネ)



《神々の黄昏》のカーテン・コールから。キリル・ペトレンコ(左)とニーナ・ステンメ(右) ©中東生

■INFORMATION

バイエルン州立歌劇場《ニーベルングの指環》

〈指揮〉キリル・ペトレンコ〈演出〉アンドレアス・フリーゲンブルク

◎第2日《ジークフリート》

〈日時〉1月31日17時/2月3日16時(会場)ナツィオナルテアター(出演)ステファン・ヴィンケ(ジークフリート)、ヴォルフガング・アブリンガー=シュベルハッケ(ミーメ)、ヴォルフガング・コッホ(さすらい人=ウォータン)、ジョン・ルンドグレン(アルベリヒ)、アイン・アンガー(ファフナー)、オッカ・フォン・デア・ダメラウ(エルダ)、ニーナ・ステンメ(ブリュンヒルデ)、エルザ・ペノワ(森の小鳥)

◎第3日《神々の黄昏》

〈日時〉2月8日17時/11日16時(会場)ナツィオナルテアター(出演)ステファン・ヴィンケ(ジークフリート)、マルクス・アイヒェ(グンター)、ハンス=ペーター・ケーニツヒ(ハーゲン)、ジョン・ルンドグレン(アルベリヒ)、ニーナ・ステンメ(ブリュンヒルデ)、アンナ・ガブラー(グートルーネ)、オッカ・フォン・デア・ダメラウ(ヴァルトラウテ)、エルザ・ペノワ(ヴォークリンデ)、レイチェル・ウィルソン(ヴェルグンデ)、ジェニファー・ジョンストン(フロースヒルデ)、オッカ・フォン・デア・ダメラウ(第1のノルン)、ジェニファー・ジョンストン(第2のノルン)、アンナ・ガブラー(第3のノルン)

※両方とも7月にも公演あり。

いたニーナ・ステンメが、まさしくワルキューレのように戦い抜いたのが、この最終日であった。開演前に「ウィルス性疾患を圧して歌う」とアナウンスされた時は、劇場中のため息がもれたが、2012年のプレミエ時から歌っている《神々の黄昏》だったことも功を奏したのだろう、不調を感じさせずに5時間40分の長丁場を歌い演じきったのは奇跡的だった。

冒頭では津波の様子が映し出される多数のテレビ画面、原発事故による避難民達の被爆検査などの視覚と、オーケストラの美しい聴覚が相容れない。エキストラがスーツの上着をまくり上げ、ジークフリートが船で渡るラインの波を表す音楽とマッチし始める。たどり着いたギンヘン家は、高級ブランド・ショップが並ぶブティック・モールのオーナー一族という設定で頹廢感が漂う。マルクス・アイヒェはグンターも好演したのに対し、プレミエ・キャスト(初演時のキャスト)のハーゲン役ハンス=ペーター・ケーニツヒとグートルーネ役アンナ・ガブラーは声の焦点の集め方が弱く、オーケストラと混ざり合えなかったのは、そのときの指揮者ケント・ナガノと今回のペトレンコの音楽的アプローチの違いを証明しているのかもしれない。

今宵のステファン・ヴィンケは、高音もやすやすと出せる彼の長所が発揮された。彼の死と共に夢が消え、舞台後方が燃えさかり、ジークリンデの愛のメロディが美しくこだまする中で、迎えたワーグナーの描く終焉は、現代社会で実際に起こりうる「この世の終わり」よりずっと甘く、羨望すら抱かされた。

4夜通して、ワーグナーの音楽を美しく描き切ったペトレンコに大喝采を浴びせる観客達は、彼が去った後の「バイエルン州立歌劇場の黄昏」を案じているようにも感じられた。(2月8日)